

---

# 変態の日常的生活

荒崎 藁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変態の日常生活

### 【Nコード】

N9930Z

### 【作者名】

荒崎 藁

### 【あらすじ】

霊好きでロリコンである俺、志多野。動物好きでファザコンである境。ニューハーフである前澤。腐女子でロリ、シヨタコンである阿部。植物好きで性別不明である田仲。こんな個性豊かな俺たち五人は高校の入学式前日に超豪邸へと引越したんだ！これで中学の時判らなかった田仲の性別を知ることができるかもしれない。田仲は幼女と何ら変わらない容姿を持つことで俺の理性を狂わせる。しかし、男かもしれないという考えもあるのでうかつに襲えない。そんなこんなで入学式を迎え、高校生になった俺たち。

高校生になった俺と境と前澤と阿部は田仲の性別を知ることができるのか？  
そんな変態たちの日常。

## お引越し！の1

「ようやく完成したんだ……」

「そう、信じられないわ……」

「俺、もう我慢できないんだけど」

「これから、もの凄く楽しみ……」

「クしゅんっ……………」

俺、前澤<sup>まえざわ</sup>、境<sup>さかい</sup>、阿部<sup>あべ</sup>、田仲<sup>たなか</sup>の順に思いの丈を口にしていく。最後のは確実にくしゃみだけど。

みんなで深呼吸……。

一瞬の静寂。

「俺たちだけの家が……」

「俺たちだけの家がさあ……」

「あたしたちだけの家が……」

「私たちだけの家が……」

四人の言葉が重なった。

それに続いて

「クしゅんっ」

俺は確実にベリー良い笑顔をしているはず。境もベリー良い笑顔を、前澤も、阿部も、田仲は『微笑の上』くらいだけど、こんな笑顔は滅多に見せない。いつもは『微笑の下』くらいだから。

「表札は志多野<sup>したの</sup>、お前が掲げろよ」

境から五人の名前が刻まれた札を渡される。

「あつたりまえだあ！」

踊るような足取りで表札を掲げた。

そして

「五つの魂、今ここに移住す！」

一言、俺は目の前の豪快に堂々と建つ『超豪邸』へもの申す。

「入るときはみんなだね」

阿部の言葉に俺を含めみんな頷き、境から俺、田仲、前澤、阿部の順に二メートルほどの鉄柵の扉を両手で握る。

「準備オーケー？」

俺は阿部を見る。

「いいよ」

次に前澤。

「いつでも」

そして田仲。

「クしゅんっ」

最後に境。

「来い！」

よしっ、と心の中で呟く。唾を飲み、鉄柵を握る両手に力を込める。

「世界の果てまで、さあ行くぞ！」

カシャアアーン。

ガン。

鉄扉を開けるのは軽かった。

きつと五人の力があるから。

「さあて」

前澤の合図で五人、手をつなぐ。俺の左手には境、右手には田仲。境の手は汗でベトベトだけど熱い、生きている証。

田仲の手は弱々しくて小さい、だが握る力は勇ましい。

「はーじめのいいーっぽ！」

田仲は言ったか分からないが、みんな一緒に一字一句全く同じことを言い、新しい我が家の敷地へと足を踏み入れた。

「あっー！！！！！！！！！！」

「……境お前！ 我が家の第一声をよくも！」

怒っているのになぜか俺は片手でガッツポーズをしている。

「入る前に目えつぶるの忘れとったああああ！」

「あああああああああ！」

俺は膝から崩れ落ちて地面に手を着く。

「ふ、ふははははは！ やったぞ！ 我が家の砂を最初に触ったぞ」

「なんとという不覚！ 志多野に先を超されるとは！ くそっ」

今度は境が崩れ落ち立場が入れ替わる。

「バカなことやってないで中、入るわよ」

前澤が俺と境のやり取りを微笑ましく見ながら玄関を目指し歩き出した。田仲が中心にあった噴水を眺めている。

「中だつ！俺が一番だあああ！」

勢いよく俺は玄関に向かって噴水の周りを走り出した。

「志多野待てえい！」

境も負けじと走る。こうやって二人並んで走ると、中学校の体育

祭の短距離走を思い出す。

「タツツツツチっ！ よっしやああ境に勝ったあ！」

「また負けたあああああ！」

俺が先にドアノブにタッチした。

「では、解禁！」

ガチャ

「あれ？」

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ……。

「開かねえええええ！」

「ずまあ！」

境がげらげら笑っている。すると後ろから前澤が

「そりや力ギかかつてるからに決まつてるじゃない。ちなみにこれが我が家の力ギ」

五枚のゴールドカードをみんなが見えるようにお披露目した。

「おっ？　それがカギ？」

いち早く俺は、カギとは思えないカギを好奇心オーラをばんばん

放出しながら見つめる。一秒遅れて境も好奇心オーラを放出してカギを見つめた。

「当たり前だけど一人ひとつ。じゃあ田仲から渡しませうか」

前澤は、後ろを無言で歩いていった田仲に渡す。田仲はゴールドカードを太陽にかざしながら不思議そうに見ていた。

「次に阿部」

さっきからずっとよだれを垂らし俺たちを見ていた阿部にゴールドカードを渡したが、なんたることかほんとにカギかもしれないカードに大量のよだれが付いた。

「阿部ええええ！ よだれを拭け！ 拭くんだ！」

俺が大声で注意した。

「はっ！？ いけない、てゆつかこのゴールドカードなに？ 私大金持ちにでもなったの？」

慌ててカードをハンカチで拭く。どうやら前澤の話を聞いてなかったらしい。

まあいつものこと。

「大切に使いなさいよ」

「前澤！ 誤解を招くような言い方をするんじゃない！ 阿部、これは我が家のカギらしい。こんなカギでどうやって挿し込んで回して開けるか分かんけど」

シャツ

認証登録のため、画面に手を置いてください。

登録完了、登録名を入力してください。

認証登録完了、登録番号『零零一』田仲様  
シャツ

機械的な何かから出てきたゴールドカードを取った田仲が、こちらを振り向き『微笑の下』をして小さくピース。

「うおおおおお！！ 田仲ああああ！」

「田仲あああああああ!!」

俺と境が田仲に群がる。

「第一声や砂よりもランクが高い、最初の認証登録を先超されたああ! しかもこれ声が凄い機械的だ!」

「くそっ! 前澤! 俺にゴールドカードを!」

「境に先を超されるのはもつといかん! だめだ! 境より先に俺にゴールドカードを!」

「そこで待つてなさい。あたしたちの認証登録が完了するまで」

「ああ……………」

俺は意気消沈する。

「消沈する必要なんてないじゃないか! 最後の大勝負、ラストを飾ろっぜ。まっ、飾るのは俺だけだな」

「そうだな。イツ前向きスペシャルってことか! その勝負、勝っ!」

自分で言つてて、意味が解らない。

認証登録完了、登録番号『零零二』阿部様。

シャッ

阿部は出てきたゴールドカードを取り、大はしゃぎしていた。

「早く認証登録してえ」

「堪えるんだ志多野」

認証登録完了、登録番号『零零二』前澤様。

シャッ

出てきたゴールドカードを前澤が取る。

## お引越し！の2

「よし！ 前澤！ カードを！」

「それじゃ、じゃんけんして勝った方が先に」

「じゃんけん！ 燃えてきたぜ！」

じゃんけんに備えて俺は準備体操をする。

「じゃんけん……今日はアイツが意気立っているようだ」

境は自分の拳を見つめニヤついていた。

「やろうか……」

「おう」

一気に辺りが静まった。

風で、今はスーパで五円で売られているビニール袋が飛んでいく。

「最初はグー……」

一瞬、境と目が合う。

「じゃんけん……」

いざ、霊界の地より来たりし者よ。俺に……志多野に霊力を分け与えたまええ！

「ポン……」

俺は霊力が集まりやすいチヨキ。集まりやすいかは自己判断。

一方の境は……

チヨキ。

「なかなかだな

「あいこで……！！」

霊力が足りないんだ！ もつと俺に、ゴーストパワーを！

出でよ！ ゴーストソオオオウル！！

「しょ……」

もちろん俺はチヨキ。

さて、境は……

さっきのビニール袋が風で舞い上がる。

「うあああああああああ！」

叫んだのは、境だ。

「はい、じゃあ志多野、あんたが勝ちね」

前澤から勝利のゴールドカードを受け取った。

境は炎で簡単に燃え尽きてしまう紙の如く、大きな平手、パーだった。

「よっつしゃあああああ！」

そして、カードを挿入口に入れる。

シャツ

認証登録のため画面に手を置いてください。

「おう！」

登録完了、登録名を入力してください。

「任せとけ」

認証登録完了、登録番号『零零四』志多野様。

シャツ

機械的な何かから戻ってきたカードを取り、確認する。さっきまで何も書かれてなかったが、しっかりと俺の名前と登録番号と長ったらしい数字が刻まれていた。

「次、って言っても最後だけだ。境、ほんとのラストを飾れよ！自分で言っただろ？」

俺は前澤から最後の一枚を受け取り、境に渡す。

「ばっかやろう……当たり前だ！ラストはやっぱり俺でないと！」  
シャツ

認証登録のため画面に手を置いてください。

「いいだろう」

登録完了、登録名を入力してください。

「境！さ・か・い！！」

認証登録完了、登録番号『零零五』境様。

シャツ

「さて、屋内へ入りましょうか。荷物はほぼ業者にやってもらったから、後は細かい荷物だけ片付ければいいわ」

シュツ

カチャ。

どうやらこのゴールドカードを隙間に左から右へスキャンするとカギが開くらしい。

玄関の扉が、とうとう開かれた。

新品の玄関、新品の廊下、新品の壁！ 傷一つ見当たらない。そしてこの玄関の広さ、五人みんなが一緒にいたとしても窮屈を感じない。てか広々としている！

なにより目の前に広がる廊下が長い！ ここから一番奥の部屋に通じるドアが携帯くらい小さく見える。

下見で前に見たはずなのに、言葉を失っているのか誰一人として喋らない。実際俺もだ。

「ねえねえ、まず何する？」

屋内の第一声は阿部だった。先を超されたけど今は許す。

「やっぱり俺たち恒例の思い出作り、記念ビデオ撮影じゃね！？」

俺がみんなにそれを言うと全員賛同してくれた。

俺たちはイベントのようなことがあると毎回俺のビデオカメラで思い出を記録するのだ。

「明日があたしたちの新たな出発点になる日だから、一から自分のこと話すってゆうのどう？」

うんうんと前澤の提案にみんなも答える。もちろん俺も。

「じゃあ早速」

俺は田仲が背負っているショルダーバッグから大型のビデオカメラを取り出す。

「リビングでやろうぜ。俺が送ったソファがあるはず、そこで一人ずつ座って録ろう！」

拒否する理由などない。みんな頷いた。

リビングは廊下の一番奥にある。

遠い。

そして重い。

ビデオカメラとその脚立を持ってこの長い廊下を歩くのはきついな……。

### お引越し！の3

で、リビングに着いた。また中が凄いなんの。

玄関よりも広い。当たり前か。

窓からの日差しで、白貴重とするリビングは砂浜をイメージさせるかのようにキレイだった。広さは学校の教室一個半と言ったところか？

「よし！　じゃあ始めようぜ」

境が十人は座れそうな白いソファのど真ん中に俺を座らせた。

「ビデオカメラ設置完了！　最初の司会は志多野、頼んだ。録画スタート！」

「え！？　ちよつこれもう始まってんの？」

うん、とみんな頷く。一人だけを録画している場合、その人以外の声は入れてはならないというのが俺たちのルール、らしい。

「げは、んん！　失礼。ではこれから【引越し無事終わったよスペシャル、ちなみに明日俺たちが入る『新山高等学校』の入学式だぜ】を始めます」

噛んでしまった……

「あと、これは激烈な下ネタが含まれる危険性があります。注意してください。全てノーフィクションです」

「はいカアット！　いいねえ。最初噛んだのいいねえ。じゃあトツバッター阿部！」

おおっと、トップから危険だ。もしかしたら一番危険……てか危険な奴は多分阿部だけだ。

阿部がソファに座ると同時に録画開始。

「名前は阿部明美あへあけみです。永遠の二十歳だよ！　この度新山高等学校、教科に入学できました」

ここでみんな拍手。

「んで、少年と幼女大好きです！　世間でいうシヨタコン、ロリ

コンかな？ でもここから重要……だって私、腐女子ですから！」  
来た……今から爆弾発言連発か？

「たいてい妄想してよだれ垂らしてます、多分。どんな妄想するかは、男の子同士が「クしゅんっ！」したり」

ナイス田仲！ 完璧なタイミングのくしゃみ！

「それで「クしゅんっ！」を「クしゅんっ！」で「クしゅっ！」みたいな妄想をしてまゝす。最後に、変態は褒め言葉です！」

はあ、危険だった。毎回阿部は危険だ。阿部は何も喋らなければ男たちの虜にできるのだが……ダメだな。

「うん実に良かった。じゃあ次、前澤！」

これもまたソファに座った直後録画スタート。

「前澤、立派な男よ。半人前のニューハーフだけど。今はとある店で働いてるわ。どんな店か、収入はどのくらいか、聞かないほうが身のためよ」

ストレートの黒い髪が窓からの日差しによってきらびやかに光っている。

「ちなみにこの家の支払いは全てあたし持ち」

カメラのレンズを獲物を見据える猛獣のように、鋭い瞳で睨みつけて

「積極的な男は大好きよお。逆に感じやすい男も……あたしがエスコートしてあ・げ・ル」

ゾツと背筋が凍りつく感覚に襲われた。気のせいかな？

「特に志多野、あんたは大歓迎よお」

気のせいではなかったようだ……。

「余談だけど新山高等学校の接待科に入学するわ」

余談にすんなああ。大事だからさ！

前澤が立とうとした瞬間に境が録画一時停止ボタンを押した。

「相変わらずだな前澤は、じゃあ次は俺だよな。前澤、録画よろしく」

境がソファの感触を味わいながら座る。

何も言わず前澤は録画開始。

「俺だ！ 境だ！ 動物だ！ 動物大好きだ！ この家に住む以上、動物をたくさん飼うぜ！ 好きな動物はワニ、ワニには思い出がたくさんあるから……」

照れくさそうに馬のような茶色の短髪をぽりぽりと掻く。

「あと、お父さん！ お父さんめっちゃ好き！ 何歳になっても俺はお父さんと風呂に入りたい！ 一緒に動物を観察したり育てたり釣りしたり、楽しいことしたい」

なんとも境らしい。いわゆるファザコン。猫のようなかわいい目をして好きなものを存分に話している。

「いやかわいくない、男だからな。隣で阿部はよだれを垂らしているが……」

「それで明日、新山高等学校動物飼育科に入学するぜ！ 将来はお父さんの動物園を継ぐことだ！」

力強い決意の言葉を残し、録画一時停止。

「いつもどおりだねえ」

阿部が腕を組み、しみじみ言う。

## お引越し！の4

「次は田仲よ、志多野よろしく」

「おうよ！」

田仲の番、だけど俺も一緒に撮影する理由……それは、田仲は一人でやらせると自己紹介をしない、てゆーか喋らない。だからいつも俺がインタビューして田仲がそれに答える、という形式を執っている。

田仲を先導してソファに座らせ、俺も一緒に座る。

ソファはマシユマロより柔らかかった。

前澤が録画ボタンを押すのが見えたので、インタビュー開始だ。

「……お嬢ちゃん、お名前なんて言うの？」

「田仲……クしゅんっ」

なんか息遣いが荒くなってきた。

「飴あげるからお兄さんのお家行こうか」

うへへ。

「待て前澤カットしろ。志多野落ち着け！」

おもいつきり境に頭を叩かれた。

「いてえなおい。何事だよ竜巻か？」

何が起きたか分からず境を見た。叩かれたことだけは分かっている。

「お前の違う人格が出てた」

「境、違うぞ。決して違う人格ではない。俺は俺だ」

境の言葉を冷静過ぎるくらいに否定する。

「誰だお前！ 後言っておく事といえば、田仲はまだ性別が判っていない。いくらかわいくて襲いたくなってもダメだ！ それだけを胸にしまつとけよ？」

こ、こいつ……何なん？

いくら俺がアレでも田仲は……。

「それはね、分からのだよミシエル君」

「ミシエル誰やねん！」

「俺の母さんの妹」

「まじか！」

「嘘」

「嘘かよー！」

俺から吹っかけたけど、実にくだらん！

「いい加減始めない？」

「うつす」

前澤の一言で、境は退散していく。

「はい録画スタート」

「じゃあ名前から聞こうかな。お名前は？」

田仲の顔を見て言う。身長が二十センチ程違うせいもあって、田仲を見下ろすような形になっている。

「田仲……クしゅんっ」

小さな口元を雲のような白さの小さい手で覆い、小さくくしゃみ。

田仲は風邪でもひいてるんじゃないかと思うくらい、いつもくしゃみをする。

「趣味は？」

「植物を育てること……クしゅんっ」

静かな水のせせらぎのような声が俺の耳を癒してくれる。

田仲と出会って四年くらい経つけど、みんな性別が判っていなかった。趣味はかなり女の子っぽい……。

今回は理性を保てそうだ。

「どんな植物が好き？」

「ハス……」

滅多に見せない『微笑の上』。

かわいいなあと思うが、男だったときのダメージが大きいのでその気持ちを抑える。

「じゃあ性別は？」

「クしゅんっ！」

性別はくしゃみによって聞き出せなかった。いくら問い詰めてもくしゃみしかしないと、俺たちは知っている。今はわざと聞いてみた。

諦めよう……時期判る、多分ね。

「明日は何の日？」

「新山高等学校植物園芸科の入学式」

いつの間に付けたか分からない扇風機の風で、深海のように青い田仲のセミロングの髪がなびいていた。この砂浜のようなりビングによく似合う。

てか寒いんだが。

「この家でしたいことは？」

「庭園でいろんな植物を育てたい」

田仲は微笑こそしなかったが、期待に溢れた瞳をしていた。庭園は田仲のテリトリーになりそうだ。

「たとえば？」

「ハス」

庭園の真ん中にあつた噴水で育てるのだろうか。

ここで録画一時停止。

「田仲の性別がかなり気になるけど、最後は志多野だな」  
カメラマンが再び境に入れ代わった。

## お引越し！の5

「はりきっていけよー志多野ー」

俺はそのままソファに座っているため、すぐ録画スタート。

「俺は志多野、幽霊や肝試しが寝ることより大好きなんです！  
んで幼女は幽霊よりも好きだ！」

田仲をインタビューしていたときには気づかなかったが、窓からの日差しが気持ちよかった。

「新山高等学校、れいがく霊学科に明日入学する予定。これからはこの家で肝試しを開催しようと思っっているからそのつもりで！」

境は録画一時停止ボタンを押す。

俺の時だけなんか早くない？ まだまだ言い足りないんだけど……。

「よし、全員の自己紹介終わったな。よし最後に、五人みんなで録ろうぜ。前澤たちも座って座って」

境が前澤たちをソファへ誘導する。そして録画開始。

「おとうさああああん！ 愛してるぜええええええ！」

まさかの大胆告白かよ！

「志多野……………好きよ」

前澤、お前もか！ それにちよつと照れくさいから！

「ハアハアハアハアハア……………」

阿部は興奮すんな。

「ハス……………クしゅんっ！」

ハスよりくしゃみが強調されちゃってる！

「南無阿弥陀仏！ 南無阿弥陀仏！ 霊の幼女と幼女大好きだあ！」  
まあ、こう流れがきたらそれに乗らないと。

「最後に！ この『超豪邸』に住むための掟を、志多野が言ってくれるって！」

「えっ？ まじ俺！？」

「そりやな！」

境はいつも急だ。でもそれがいい。そうじゃないと境じゃない。

「この『超豪邸』に住む掟！ それは『変人か変態、およびそのどちらかであること』だ！」

この意味は、みんなに解っただろうか。

「いいね完璧……」

阿部がつぶやく。

「この掟はそれにあてはまれば住めるってことよね。追加する人はいるのかしら」

前澤は頭が切れる。まさに

「その通りだ！」

俺が言いきると、境は録画停止ボタンを押した。

「で……今から何するの？」

まだ何も考えていなかったことを阿部が聞いてくる。

前澤が壁に掛けられた時計を見た。

「まだ三時じゃない。自分の部屋でも見に行く？」

「行く！ じゃあみんな、解散！」

そう言つてドタドタと境はリビングから飛び出していった。

「部屋の荷物は自分で片付けなきゃダメよ。じゃああたしも部屋行くわ」

「私も私も！ みんな後でねー」

前澤と阿部は田仲と俺に手を振り、リビングを後にした。

「自室行く……クしゅんっ」

ぺたぺたとゆっくり細い足を動かし、田仲も自室へ向かう。

もう各自室は引越す前から決めてあるため迷うことはない。でも全員一階の部屋を選んだ。三階まであるのに……。

境と田仲は一階を選ぶ理由はだいたい解るけど、阿部や前澤まで一階とは……まあ俺もだけど。

リビングに一人でいるとかなり淋しくて、無駄に広く感じた。なので俺も自室へ行くために部屋を出た。

「元氣だったかあああああゴン！ それにザレスも！」  
玄関に一番近い部屋から、境と思われる声が聞こえてくる。

声でけえ。

後で行ってみるか……

自室へ向かうため長い廊下を歩き出す。俺の部屋は境の部屋の向かいにある部屋の隣だ。

玄関のすぐ隣が良かったが、田仲にじゃんけんで負けたため、その部屋になった。

歩いていると、足に冷たいぬめつとした感覚がした。

「な、なんだこれ」

床を見ると透明の水みたいな液体が、すぐその扉の下からゆっくりと流れ出ていた。

たしかこの部屋は阿部だった気がする。

ドアノブを持ち、開ける。

「阿部、何してんだよ。廊下に水的な液体が」  
べちゃっ

部屋の中は全面水浸しになっていた。

「ハアハアハアハア。し、志多野？ ごめん、止まんない」  
回転するイスに座りながら一冊の不健全な漫画を持っていた。

その漫画で、なぜ水浸しか理解できた俺って……。

「阿部、よだれが半端なくやばいぞ！ 汚い、拭け！ 廊下も雑巾で拭け！」

勢いよく扉を閉める。汚いので、早々に阿部の部屋から遠ざかった。

阿部がどうして一階を選んだか、少し解った気がした。  
「はあ」

ため息を吐き、また自室に行くため歩く。

ふと視界の右に映った、扉に掛けられた木の板が気になり、よく見てみると『志多野大歓迎』と装飾されていた。

見なかったことにしよう。

そして再び歩き出す。阿部と前澤の部屋を過ぎたのでそろそろ自室だ。

「肝試し、いつやろうか……」

俺は一人つぶやき、やっとこさ自室の前に来た。

ドアノブに手を置く。

「先に境のどこ行くかな」

なぜか気が変わり境の部屋に行くことにした。

俺の部屋から境の部屋は近い。

# お引越し！の6

「境—入るぞ—」

力チヤ。

ゾわー。ー。ー。ー。

一瞬で背筋が凍りついた。気のせいなんてもんじゃない。本当に凍っているかのようにに寒かった。

「へ、へビがああああ！」

俺の右足から、這い登ってくる。

「さああかあああ  
いいいいいいいい！！」

へビへの恐怖心と、驚愕し過ぎで体の自由が利かない。

「おう志多野、スネーク逃がすなよ」

「知るか！ 今すぐ逃がしたいわ！」

太くて重そうな体で、すると俺の左腕まで登ってきた。

脅威な眼と目が合ってしまった……

「ひえええええ」

ますます動けなくなった。カエルになった気分だ。

「ささささ境？ この腕に絡まってる物体をどうすれば……」

へビは二別れた舌を出したり閉まったりする。

「せめて噛まれないようにすることだな」

え……？  
いや、まさかね……

「スネークは、毒蛇だ」

「ぎや ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ  
 ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ  
 ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ  
 ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ  
 ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ」

「大声はやめろよお。ほかの動物がびっくりするだろ？」

今すぐにでも氣絶しそう。なんなら氣絶したい……でも世の中そ

んなに甘くない。

「俺……ここで死ぬのか！？　死ぬのか！？　死ぬんだな！？」

「はは」

乾いた苦笑いを、境はした。

「死にたくねえよ！？　まだ俺したいこといっぱいあるよ！？　幽霊と会話したり、幼女と会話したり、ときに大人の階段上ったり……兎・に・角！　死ぬのは嫌なんだよ！　しかも明日から新しいストーリーが始まるんだよ！　霊界と通信ができるようになるかも知れないんだよ！」

「そうか……残念だったな」

境はキツネの頭を撫でながら言う。

「あきらめんなよ！！」

「そんなに元気なら、霊界でも楽しくやれるよな」

「やれねえよ！　死んでも未練たらたら過ぎてこの世から脱け出せねえよ！　無事に三途の川も逝けねえ！！」

「良かったじゃないか。死んでからの目標ができて」

「良かねえよ！！」

「そーなのか」

「そーなんだよ！　こちとら真剣だぞ！」

「むむ……そこまで言うなら……」

境……

「よろしくお願いしまあす！」

「べ、べつに志多野を助けたとかじゃなくてスネークが志多野ばっかりとくつついてるから離すだけであって……勘違いすんなよ！」

うん、お前いつの間にそんなキャラになったんだよ。

「ほら行けえ！」

境がカゴからネズミを放った。瞬く間にネズミは部屋内を走り回る。

するする……どん！　と音を立て、左腕ですつと俺を睨みつけていた茶色っぽい毒蛇は、床に落ちた。腕がかなり軽く感じた。

「今から弱肉強食の世界が見れるからな」  
俺と境はじつと、毒蛇を見据える。そして……

っ。

やりおった……まじでやりおった。

「ごめんな……」

そう言つて食事中の毒蛇へカゴを被せる。

「よし、一件落着！」

「俺の精神的体力が限界を超えたがな」

二、三回深呼吸をした。

「で、志多野は俺の部屋に何の用だ？」

鹿の大きな角をタオルで磨きながら言う。

「宣言通りのことに、もうなつとるし！」

よく部屋を見渡すと、十二畳の部屋の七割くらいがいろんな動物で埋め尽くされていた。

「普通だろ？ ああついでに言つとくけどスネークはママシだから」

……………

「まじで死ぬから」

「噛まれなかったから幸いだな」

にこつと笑う境。他人事だと思いやがって。

「まあそうだな、じゃあ部屋戻るわ」

ため息を吐き、肩を落とす。

「おー！ また後で」

境はライオンの子どもに首元を舐められながら、俺を見て言った。  
ドアを閉め、たいして運動もしていないのに疲れた体を、早くベツドで休めたいと思い、早足で部屋に行った。

「はああああ」

ベッドヘダーイブ。ふかふかで気持ちいいな。このまま寝たいな。でもベッドと机と、数十個のダンボールがあるだけのただっ広い部屋で寝るのは無理だな。

幽霊が集まりやすい部屋にしくは！

「よしっ」

寝たい気持ちを強引に引っ込め、早速部屋の片付けをする。

ベッドから一番近いダンボールを開ける。中は肝試しに使う道具類が入っていた。

これはまだ必要ないので次のダンボールへ。

今度はお目当ての物が入っていた。

まず、青と白の縞模様のカーテン。

そして数十本もの木製の卒塔婆<sup>そとぼ</sup>。それには俺が適当に書いた文字が書かれている。『霊よ来い！』とか『冥界の入り口』とか。

そしてこれを部屋に無造作に立て掛けた。

あとはヘビのようなくにやぐにゃの、昔風の文字がびっしり書かれた古びた紙を壁一面に貼り付ける。幼稚園の頃から部屋に飾っていたが、いまだになんて書いてあるか解らなかった。

## お引越し！の7

「志多野ー、今日の晩飯な……っておい、また卒塔婆かよ。それにその意味不明な文字の紙」

そんなとき、境がやって来た。すごい呆れ顔だ。

この良さが解らないなんて、まだまだだね。

「これがないと落ち着いて寝れねえんだよ」

「これがあると落ち着いて寝れねえんだよ」

境は俺と全く同じ口調で、全く真逆なことを言う。

「そんなはずない！　これがあるから毎日気持ちよく安らかに穏やかに眠れるんだぞ！　きつと安らかに眠ることができる霊でも俺に添い寝してくれてるからかな」

俺はそうだと嬉しいなあ、と思いながら期待に胸を膨らませる。

あんまり認めたくないけど、俺は靈感ゼロだ。

「結構その光景を想像すると怖いんだけど……」

実際に俺もその光景を想像してみる。

……実に夢のような時間じゃないか！　少しテンションが上がってきた。

「おい、もし霊が添い寝してたとして、その霊がオッサンや熟女だったらどーすんだよ」

ジターーーー。

さっきのへビの時とは違う寒気がする。

「やめろ！　せめて女子中学生……いや！　女子小学生にしてくれ！」

「普通に『幼女』って言やあいいだろ」

「幼女だ！」

「おせえよ！　ちなみにその幼女の服装は？」

「もちのろん白装束！」

「その幼女は生きてる？」

「生きてる！」

「霊関係なくなつたぞ」

「じゃあ死んでる！」

「かわいそうに……てかなんだ、この言い合い」

「兎に角俺は、幽霊の幼女といつせ……」

「ストオオップ！」

境が腕を伸ばし手首を曲げ、ストップポーズをする。

「分かつたから、今日の晩飯の話だ！」

「米と塩か？ それに水と花……あとはその人が好きだった食べ物」

「墓参りじゃねえよ！」

なんでだろう、境が息切れしている。顔も赤い。

「俺のツツコミスキルを上げて何がしたいんだよ志多野は」

「世界を滅ぼそうとしている魔王討伐？」

「俺に聞くな！ ツツコミじゃ魔王討伐できねえだろ！」

「何を言う！ ツツコミは千のダメージを与えることができるぞ」

「つええなおい！ いやだからそうじゃなくて！ 早くしねえと前澤が次のストーリーに進めないんだって」

「ちなみに次のストーリーどんなん？」

「ああ？ それは志多野が言つた通りの料理を作るための材料の買出し……ってだ・か・ら！」

「そーゆうことかよ。それならそうと早く言えばいいのになあ。まあ、前澤の手料理は美味いから何でもいいんだけど、とりあえずガム」

「いくら前澤でも作れる物と作れない物がある。それに晩飯にガムはいやだ」

「そうか……そう来るなら、俺は容赦しない」

すぐ近くにあつた卒塔婆を一本、俺は両手で持ち、剣のように構える。

「悪いが、そう長くは相手にできないぞ？」

ニヤつきながら境も近くにあった卒塔婆を持ち、構えた。

ひゅーーーーー。

俺の脳内で勝手に風を吹かせる。

「いざ！」

「いざ！」

境が俺の言葉を追いかけるように言う。

「己の信念を貫き通すために！」

「我が信念を貫き通すために！」

二人の信念が、ぶつかり合おうとしている。

「参る！」

「参る！」

最後は二人の言葉が重なった。

力強く床を蹴り、全速全身。そして卒塔婆を振りかざす。境も

同様だった。

風を裂くように振り下ろす。

「安心しな、みねうちだ」

## お引越し！の8

俺は 見事に風のみを切り裂いて、境に腹を切り裂かれた。いやまあ、血とかが出てないけど。そしてその場に倒れた。

てゆうーか卒塔婆に峰も刃もねえからな！

「諦めてちゃんと考える！ 志多野の道はそれだけだ」  
どうやらその道しかないらしい。

嫌だなあ。

「仕方ない……そーだなー、今日は質素に海苔と醤油とたくあんと米でいいんじゃないか？」

萌えもクソもない普通の立ち方をしてから言った。てか萌えとクソがある立ち方って何なんだ？ 気になる……

「おお？ これまた質素だな。なんで質素なんだよ」

「質素だからだ」

「意味わかんねえから」

意味が解らないらしい。

よし、そんな境のために俺が説明してやろう。

「質素とは、身なりや暮らしぶりなどに無駄な金を……」

「ストップ！」

境が先ほどと同様にストップ合図をする。

「誰が質素の意味を説明しろと言ったんだよ。それに何気に詳しいし」

「で、ライスタワー、海苔と醤油と時々たくあん……」

「おかずどこいったんだよ！ ホウエアーズおかず!？」

「ツツコミが早いぞ境。まだサブタイトルを言っていない!」

「まじかごめん。じゃあサブタイトルどうぞ」

申し訳ないように、境がどうぞと手を差し出す。

「海苔と醤油と時々たくあん、えっ？ 俺のおかずはどこへ？」

「……ほんと、おかずどこだよ!」

「それは映画を見てからの楽しみだよ境」

「これ映画化すんの？」

「しないけども」

「じゃあ言うな！」

「境いいいい！」

突然、乱暴にドアを開けて前澤がやって来た。そのせいで境が腰を抜かしてしまった。

一瞬で空気が変わった。

「あんたいつまで待たせれば気が済むんだ！ 早くしねえと店閉まっちゃうだろうがよ！」

怒り狂っているせいでいつもの前澤と男の前澤が混じってしまっていた。なんというか……前澤はどっかに分けたほうがやっぱりいいな。混じっていると凄まじく気持ち悪かった。

「いや、それはその……すいませんでした」

境が土下座して謝った。

「まあいいわ。今日の夜は寝かせないから、覚悟しときなさい」

あーかわいそうに。前澤と一線を超えなければいけないのか……

やばい吐き気が。

今にでも境は失神しそうだった。

そんなに嫌なんだな。当たり前だけど。

「で、今日の晩ご飯は？」

「海苔と醤油と時々たくあん、えっ？ 俺のおかずはどこへ？」

俺はすかさず答える。

「分かったわ」

「分かったの！？」

境が大声を上げている。

「当然よ。志多野の言うことは全部理解できるわ」

うーん、嬉しいような……嬉しくないような……微妙なところだ。

「じゃあ買い物行ってくる。留守番頼んだわよ」

小さく一回だけ手を振り、前澤は出て行った。

「俺……晩飯まで考え事してくる……」

しよぼくれた顔をして境も部屋から出て行った。

考え事というのは聞かなくても分かった。俺だってその立場なら悩む。

「さて！ 俺は晩飯まで寝るかな」

ベッドに入り、気持ちよく眠りに落ちていった。

## お引越し！の9

「てめえ起きやがれ！」

別世界から境の声が聞こえてきた気がした。

「起きろつつつてんだよ！」

「う……うん？ 空襲か？」

何だ急に。こちらら眠いんだ起こすなよ。

「こんな時代に空襲なんてあるわけねえだろ！ 早く起きろ」

「あと五時間……」

「あと五分より質悪いぞ。まあいいで起きろ！」

起きろと言われて素直に起きるわけない。眠いから。

「まあいいや。引きずり持つてくからよろしく」

境はそう言うのと布団を剥がそうとした。しかし布団はしっかり俺が握っているので剥がれはしない。

「いちいち抵抗すんな！」

境が無理やり布団を引っ張ったので俺ごと床に落ち、背中を強打した。

「いてえ……」

「よし、行くぞ」

そのままリビングまでほんとに引きずって行く。

リビングに入ると味噌汁のいい香りが……しなかった。

境だけの力ではどうにもならなかった俺の布団を、三人の勇敢な戦士が加わったことにより剥がされてしまった。

「じゃあ食おうぜ！ 質素過ぎる飯を！」

俺は介護されているかのように、イスに座らされる。眠い。

「では、いただきます！」

「いただきます！」

前澤の言葉にみんな続いた、俺を除いて。田仲は分らんけど。

「おやすみなさい」

そして寝る！

「おまつ！ 寝んなよ！」

だが断る！

「もう寝かしのけばいいんじゃない？」

阿部、ナイスだ。よくぞ言ってくれた。

「うんまあ、そーだな」

これが俺たちの、最初の食卓だった。

## 俺の正義！

「ちよい、あそこ」

俺は隣で歩く境の肩を叩き言った。

「ああ？ そーゆうのは阿部か田仲に言ってくれ」

「阿部！ 田仲！ あそこ」

反対の歩道に、俺のジャスティスが歩いている！

「大丈夫、私たちも気づいてるから」

そうか。それにしてもいいな！

あれこそ神がこの世に最後に残した希望なんだろうな。

「志多野、あんまあつちばつか見とると不審に思われるぞ」

「大丈夫だ。手は出してない」

「いや、そーゆうことじゃなくて」

最近是不審者が多発しているからな、集団で登校している。俺たちのことではなく、反対の歩道で歩いているあの子たちのことだ。男共はどうでもいい。

三人並んで歩いている真ん中の子

かわいい！

あのポニーテールはその子の母親が結ったものなのか？

もしそーだったら羨ましすぎるだろ！ 俺と代わってくれよ！

それでピンク色のランドセル背負って……………ミ、ミニスカート

……………だと？

「ガードレールの白いのが付いてるわよ」

「大丈夫だ」

「でもだいぶ白いわよ、その部分だけ白無地みたいに」

「大丈夫だ」

実際俺はほとんど前澤の話を聞いていなかった。目線はずっとあのポニテの子に向けられている。

幼女がニーソを履くとなぜあんなに可憐に見えるのだろう。

「てかさ、前澤」

「なに境」

あの細いスラツとした足触ってみてえ。

「お前なんで女の制服着てんの？」

「なんでって、仕事場じゃいつも着てるわよ。どこか変？」

絶え間なく笑うあの子の横顔が、天使そのものだった。

「いや、男が着てるとは思えないほど似合ってるけども。男だろ…

…学ラン着るよ」

「いいじゃん！ 前澤めちゃくちやかわいいじゃん！」

あの子たち右に曲がっちゃったじゃねえか！

……後姿もかわいいな。

「女である阿部がそれ言っちゃ終わりの気がするんだが。そしてもう一つ、田仲はなんで学ランなの？ 男なの？」

ちょうど横断歩道がある！ でもまだ赤か…

「着たかったから。クしゅんっ」

おっ、青になったぜ。

「そうなのか………てか志多野も少しは会話に加われ………って！ おめえどこ行く気だ！ そっちは学校じゃねえぞ！」

「こっちだって学校だ！」

右に曲がり横断歩道を渡ろうとする俺の左腕を、境の子どものような手に掴まれた。

「学校って、小学校じゃねえか！ 俺ら行くの高校だぞ！」

境の手を振りほどこうとする、が……こいつ、なかなかの握力だ。伊達に動物飼ってないな。

「離してくれ。俺には行かなきゃならない所があるんだ！」

「それが高校だよ！」

「あーもう赤になっちゃったじゃねえか！ てかこの信号変わるのはやっ！」

「俺らはこっちだ。入学式に遅刻とかぜってえー嫌だからな！」

「ああああ……あの子、かわいかったな………」

ぼそりと俺は呟き、境に左腕を掴まれたまま真っ直ぐ横断歩道を渡った。というより引きづられた。

「てか横断歩道渡ってすぐのところ、正門あるのに右行こうとすんな」

「そうは言ってもだな、俺は高校より小学校のほうが良いと思うんだ」

「小学校のほうが良くても俺らは今日から高校生だ。ほら！ここにだって幼女、っぽいのはいる！」

境は田仲を指差す。

「……………そうだったな。すまん境！ 田仲！」

俺は境と田仲に深く腰を折り謝った。急に謝られた田仲はちょっと顔に困惑の色を出していた。

「正門の前で何やってるのよ。恥ずかしいにも程があるわ」

呆れ顔で俺たちを見て前澤は言う。

よく辺りを見てみると俺たちと同じ入学生らがこっちを見て笑っていた。

「とにかく行くわよ」

そんなの、俺と境が気にするはずがない！

そして羅生門みたいな正門を通った。

## 運命は一つとは限らない

あれから俺たちは人波に流されて入学式が行われる講堂へとたどり着いたのだった。

「おい、これは……」

「ありえんて！」

俺と境は呆れて　いや、驚嘆していた。

呆れているのは前澤のほうだ。

「この広さなんだよ！　アメリカの牧場並に広いぞ！」

「いや、それは言い過ぎだって！　でもそんなくらいありそうだな！」  
講堂の広さが異常過ぎる！

なんだこれ！　俺ん家とは比べ物にならん！

「席自由だけど、どこ座る？」

前澤はなんでそんな冷静でいられるんだ！

「一番前行こうぜ！　一番前！」

境が人の迷惑など気にせず一番前の席へ走っていく。

その後を俺は、迷惑を掛けた人たちに軽く謝りながら境に着いて行った。

「おせえぞ志多野！」

丁度一番前の席は空いていたようで、境は先に座って俺に手を振っている。

「お前が早いんだよ！　謝るのに苦労したぜ……」

後半は独り言のように呟き、境の隣に座った。

「もう急に走らないで。それに一番前って……」

まるで母親のように前澤は俺たちを叱る。

「私はどこでもいいよ。ただし！　境か志多野の隣ね」

できれば阿部、俺の隣に………ダメだ！

よだれが俺に付く可能性があるしな。

となると

「志多野の隣はあたしよ」

ですよねー！。

よだれが付くか、痴漢的行為を受けるか……………。  
俺の運命は『邪<sup>じゃ</sup>』しかないのか！

「……………クしゅんっ」

少し強めにくしゃみをしながら、田仲は俺の隣に座った。

「田仲あああああああああああああ」

あまりの嬉しさに俺は、幼女のような体つきの田仲に抱き着いていた。

濃い青の肩よりちよつと長い髪からは、女の子特有の香りがして、理性が狂いそうになったので、田仲から離れる。

ありがたやゝありがたやゝ。

しかし、別に阿部と前澤が嫌いなのわけではない。

むしろ好きだ！ ライクの意味で。

「なかなかやるわね…………… 今日譲ってあげるわ」

悔しそうな顔で、涙を堪えるようにしながら田仲の隣へ前澤は座った。

そんなに俺の隣に座りたかったのか…………… なんかすまん……………。  
でもなぜ田仲は、俺の隣に自分から座ったのだろうか？

## バカとバカはバカだ

入学式が始まって、何時間経ったのだろう。

空席だった俺たちの周りも満席になって、ただならぬ雰囲気醸し出している。

今年の新入生は六百三十二人だと、校長の長ったらしい話の中で言われた。

「では続きまして、生徒会長から新入生へ祝福の言葉を頂きます」  
どうせこれも長いんだろ。

この手の話は長いくせに面白みがないからなー。

しかも女か……。もう顔から礼儀正しさが伝わってくるぜ。

「新入生の皆さん、おはようーございます！」

・・・

明るく元気に、且つ丁寧に生徒会長は挨拶をした。

挨拶するのは極々普通のことだ。が、この間は何だろう。なぜ、話を進めないのだろう。

まさかこんな重い空気の中、この生徒会長は俺たちに『おはようございます』を求めているのか？

みんな言う気配ゼロだな……。なんか生徒会長がかわいそうだ。そんな状況なのに生徒会長は笑顔を保っている。いい加減話進めてくれ……。

心が痛む。

「おはよーうーございまああああす！」

突然、重力よりも重いこの空気と静寂を破ったのは、左隣にいる境だった。

おまけに席を立っている。

境……………お前は一人で走りすぎだ。

俺だって一緒に走ってやるよ！

「おはよーうーございまああああす！」

俺も席を立ち、隣の境に笑いかける。

境もそれに応え、そして俺たちは羞恥の半端ない重さによって席に着いたのだった。

ただ生徒会長がこちらに向けてくれた微笑みだけが救いだった。しかし俺と境は入学式が終わるまで、ずっと俯いていた。

## 変態と混浴など却下！

入学式が終わってから、境と俺に話しかけてくる人が殺到していた。

俺の顔は（前澤と阿部が言うには）悪いほうじゃない（良くもない）し、境だって小学生みたいな外見で至って普通だ。

いや、高校生にもなつてまだ小学生の趣おもむきがあるのはちょっと異常か。背も低いし。

そんな俺たちに話しかけてくる理由はもちろん、入学式中の、あの羞恥心の何物でもない、挨拶だ。

今思うとなぜあんなことをしてしまったのだろう……。自分の言動に深く反省する。

「はあ。全く、境のせいで精神的に疲れた」

ようやく話しかけてくる人も少なくなり始めた頃、俺は肩を落とす境に愚痴をこぼしていた。

「しょーがねえだろ！　あまりにも生徒会長がかわいそうだったんだよ！」

大声で喋るな恥ずかしいだろ。

かわいそうだったけども。

「もう帰ろうぜー。前澤、帰ったら風呂入れてくれ」

俺は棒読みで前澤に言い、とぼとぼ正門に向かって歩き出す。

「分かったわ。そのかわりあたしと入るのよ」

その後に前澤たちも続く。

「よし、境も一緒に入るぞ」

前澤と二人だけで風呂に入るわけにはいかない。

「げっ、まじで」

露骨に嫌そうな顔を見せる境。

「男だけのお風呂！？　私も入る！」

阿部が片手を上げながらジャンプを繰り返す。

ジャンプのせいで特別な日しかやらない後ろに束ねたお日様の  
ようなオレンジ色の馬の尻尾が上下にゆっさゆっさ揺れ、制服のス  
カートがひらひらしてパンツが見えそうになる。

周りにいた男が過剰に反応して阿部（主に下半身）を見ていた。  
阿部はパンツなど見られても気にしないタイプだ。

今の発言が、それを納得させられる。男だけの風呂に自分も入  
ろうとするなんて、こいつ何者だよ。腐女子だけど。

「ダメだ」

「ダメだな」

「ダメだわ」

阿部は男二人と女モドキ一人に拒否され、ふくれっ面をする。

湯船をよだれ船にされるわけにはいかない。

変態と混浴なんて不本意だ！

「えゝ。じゃあもういいよゝだ！ 私はたなかと入るから！」

と、聞き捨てならんことを言いながら阿部は後ろから田仲を抱く。

くそお、俺も抱きてえよ！ いろんな意味で。

じゃなくて、阿部と田仲と一緒に風呂だと？

そんなん世界が認めても俺は認めんぞ。どうやらそれは俺だけではなく、境と女モドキも同じ考えだった。

しかし今まで性別を隠してきた田仲がこんな易々と性別が判つてしまうような、一緒に風呂に入るなんて行為をするとは思えない。

「まじで？」

俺と前澤の代弁者は境だった。

「まじだよ！ ねゝたなか」

田仲は物凄く歩きづらそうになっているが、表情は笑っているように見えた。

まさか！ 一緒に入ることを楽しんでいるのか！？

「クしゅんっ」

清楚な左手で口元を軽く抑える田仲は、彼女（彼）の幼さを引き立てていた。

俺はいつの間にか田仲に見とれていたことに気づき、反射的に反対側に顔を向けると、たくましい女性のような左手で、口元を抑えてくしゃみをする前澤がいた。

そのくしゃみには全く幼さは感じ取れなかった。

「今の田仲のくしゃみは『イエス』という意味なのか？」

境は恐るおそる田仲に聞いた。

俺は田仲のくしゃみの意味より前澤のくしゃみの意味の方が知りたいんだが……。

めっちゃウインクしてくるし。

俺は完全無視を続けると、前澤らしくないしょんぼりとした顔

をするので、無性に申し訳ない気持ちになった。

「そおだよねえーたなかあ」

未だに田仲の後ろに張り付いている阿部の確かめるような口調に、田仲は微笑の上ではつきりと頷いた。

「まじで!!」

「まじで!!」

「まじで!!」

男二人、いや男三人は驚きを隠せないでいた。さすがの前澤も男が出てしまっている。

それほど衝撃的だった。

まさか本当に一緒に入る気だったとは……。

こうなってくると田仲は女という線が高くなるぞ。

次の俺の一言で、決着を着けてやる！

「しょうがない阿部、特別に俺たちと一緒に風呂入ろうぜ」

傍<sup>はた</sup>から聞けばこれはただのセクハラにしかならないだろうな。

阿部なら絶対この話に食い付く！　そして阿部が俺たちと一緒に入ることで田仲が『一人で入る』なんてことを言えば、もうほとんど田仲の性別は女だと思ってい。

「ほんと!?　入る入るうー!」

阿部はやつと田仲から離れ、俺たちに満面の笑みをした。

さつきより大きくジャンプすんな。パンツ見えとるから。遠目でこつち見とる男子いるから。

喜びが隠せないのかずっとジャンプをしている。

変人も共に・・・

そんなことより、さあ田仲、どう来る？

一人で入るのか？ 俺らと入るのか？

「……………」

何も言わない！？

ということは俺らと入るということか？

「たなかも一緒に入るよね？」

阿部ナイス！ よくぞ肝心なことを造作もなく聞いてくれた！

「うん……………！」

微笑の上…………いや、この笑顔は今まで見たことがない。

まだ乳歯じゃないかと思ってしまうほど白い歯をかすかに見せ、  
子どものような、無邪気な笑顔をした……。

「……………」

意識が放浪とする中、俺は細い『汗』を流していた。

「お前何泣いてんだよ！」

俺は今、境から背中を叩かれたのだろうか……？

しかしそんなことは眼中にない俺は、おぼつかない足取りで田  
仲に近寄った。

視界はぼぼばやけていたが、しっかりと強く、目の前の『幼い  
女の子』を、抱いた。

「俺の……………娘になつてくれ……………」

心の奥底から出た切実な、正真正銘の願いだった。

「娘かよ！」

「境 ダメよ」

そういえば田仲を抱くのは今日二回目だったな。

あの時には感じ取れなった、温もり、鼓動。そして田仲の身長  
がいかに低いのか。

もつと抱いていたかったが、なぜか俺は田仲を離した。  
いつもの俺なら永遠と抱いていたことだろう。

しかし今はそういう気分、いや気持ちじゃなかった。

俺は『汗』を手で拭って、

「娘だよ！」

境へ突っ込んだ。

## 変態は治らないもの

その後セクハラだのロリコンだの誘拐犯だの、周りにいた新入生たちに散々言われたが、今の俺はそんなことどうでもよかった。

田仲の最高の笑顔を見れたのだから！

それから徒歩四分の家に着くまでの間、俺は気持ち悪いほどニヤついていた。

「たっだいま〜！ お風呂お風呂！」

阿部は靴を脱ぎ捨て、自室へドタドタと走っていく。

「ただいま帰ったぜ！ 早くエサやらんといかん！」

境は阿部の分も靴を揃えてエサをやり、自室へ行く。

「ただいま。早速お風呂の準備しなきゃ……」

前澤も靴を揃え、自室にカバンを置きに行く。

「……ただいま。クしゅんっ」

田仲の靴小さいな……。

十九センチ！？ ほんとに高校生だよな？

「ただいまー。俺風呂まですることねえな……」

みんなやることあつていいな！

リビングにいたら絶対前澤に風呂の準備を手伝わされるので、

特にすることはないが風呂まで部屋にこもることにした。

「はぁ。今日はほんとに疲れたわ」

俺は肩からため息をし、カバンをその辺に放り投げ、ベッドへ横たわる。

あの笑顔、またしてくれないかな……。

ベッドの上に読み散らかした分厚いアルバムの中から一冊を手に取り開く。

そこには俺が今まで趣味で撮っていた写真がびっしりとある。

このアルバムは公園で撮った写真しか貼っていない。

まず、一枚目。

明るく元気に友達たちと鬼ごっこをしている少女（小学三年生）。

二枚目。

転んでしまって大泣きしている少女（小学二年生）。もちろん撮った後に手当てをして慰めてあげた。

三枚目。

ピンクのスカートでブランコを勢いよく漕いでいる少女（小学四年生）。ギリギリでパンツが見えなかったのが俺の感情をたまらなくヒートアップさせた。

こんな感じで最初から最後まで全てのページには少女の写真がある。

公園シリーズだけでなく、街中、海、プール、山といった様々なシリーズのアルバムもある。

これは決して盗撮ではない。ちゃんと親御さんの許可を得て、撮っているのだ。

しかし娘がいる家庭だけ撮っているのはかなり怪しまれる。なのでスーパーウルトラグレート超不本意ではあるが、息子がいる家庭もちゃんと撮っている。

少年の写真は全て阿部にあげていた。

そして、皆は俺のことをこう呼ぶ。

ロリコンだ。ペドだ。

ペドじゃねえよ！

風呂は裸？ それとも水着？

風呂の準備ができ、更衣室へ行って風呂の様子を見るとみんなの  
テンションが上がる。

主に風呂のでかさに対してだが。

「何これ！ 風呂じゃなくね！？ 温泉じゃん！」

「五人入っても余裕で泳げる広さだな！」

俺と境は風呂、いや温泉を見て落ち着きを保つなんて不可能だった。

といつても湯が湧き出ているわけではないので、本物の温泉ではない。

「よし志多野！ 早速水泳で勝負だ！」

「当たり前だ！」

「二人ともちゃんと着替えなさい。制服のまま入らないでよ」

俺の母さんみたいなこと言うなよ……。

まあ、たしかに制服のまま風呂入るのはおかしいか。

でも着替えるってどういうことだ？ 風呂は裸だろう普通。

「着替えるってなんだよ。風呂は裸で入るもんじゃねえのか？」

境も俺と同じ考えだったようだ。

「水着よ。志多野とあたしだけだったらいけど、阿部と田仲がいるじゃない」

田仲は性別不明だから何とも言えんが、阿部がいるからか……あれでも一応女だもんな一応。

「私は全然いいよ。むしろ裸の方が！」

「部屋から水着持ってこようぜ志多野」

「だな。行くぞ」

阿部の言葉をかき消すように俺たちはわざとらしく大きい声でそう言った。

「くそ！ 部屋まで遠い！」

「玄関に一番近い部屋なんて選んだの誰だよ！」

「お前だわ！」

長い廊下を二人で愚痴りながら走る。

ようやく自室にたどり着き、夏物と書かれたダンボールを開く。

「水着あつたかー？」

「大丈夫だ。よし！」

水着とゴーグルを持って、また長い廊下を走った。

「みんなもう入ってんじゃん」

「はええな……でもこれは運がいいぞ」

脱ぎ散らかされた制服やキレイにたたまれた制服が置いてあるだけだ。

もしかしたらこれで田仲の性別が判るかもしれない。結局田仲も一緒に入ることになったことで、また振り出しに戻ってしまったかな。

「ああ、運がいい。スーパーウルトラグレート超不本意だけどどこかで聞いたことのあるフレーズだなそれ。」

境も気付いているなら話は早い。

負けたら夜這い！

「じゃあゲームだ。上から一つずつ衣服をどかしていく。それでどかした時に『物<sup>ぶつ</sup>』があつたらアウト。罰ゲームはそうだな……前澤の部屋に夜這いに行くのはどうだ？」

「いいだろう。俺からいいか？」

「いいぜ」

そして俺は一番上にあつた学生服（上）をどかす。

セーフだ。

「俺か……」

境は学生服（下）をどかす。

セーフ。

「ここからだよな問題は……」

俺は白いタートルネックをどかす。

「セーフだ」

心拍数が緊張とちよつとした罪悪感でかなり早かった。

「やばいな」

「どこがだよ。次靴下だからその下にあるシャツ見えてんじゃねえか。ずりいよ」

余裕で境は靴下をどかす。

当たり前だがセーフ。

ここからが正念場だ……。

今さら後には引けん。

「どかすぞ？」

「ああ」

一呼吸し、俺は真っ白いシャツをどかした。

「はっ？」

「はっ？」

俺と境はシャツの下にあつた物を見て、一瞬思考が止まった。

「……どうする」

「俺に聞くな………」

どの角度から見てもこれは、ピンク無地のボクサーパンツだよな……？」

田仲は男なのか？

どう見てもこれは男物にしか見えない。

女でもボクサーパンツ履くかもしれん……。そんなの聞いたことないけど。

「罰ゲームはちゃんとやれよ。『物』が出てきたからな。とりあえず風呂入ろうぜ」

お前ちゃっかりドSだろ。今の俺の精神状態にさらに追い討ちをかけやがった。

「まじかよ………」

まあ、今は考えても仕方ないか！（現実逃避）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9930z/>

---

変態の日常的生活

2012年1月5日22時54分発行